

わが国の看護基礎教育における シミュレーション教育に関する実態調査

A Status Survey of Simulation-based Learning in Japanese Undergraduate Nursing Education.

H31助人28

代表研究者	益田 美津美	名古屋市立大学 大学院看護学研究科 准教授
	Mitsumi Masuda	Associate Professor, Graduate School of Nursing, Nagoya City University
共同研究者	杉山 文乃	国立看護大学校 看護学部 准教授
	Fumino Sugiyama	Associate Professor, School of Nursing, National College Nursing of Japan
共同研究者	八木(佐伯) 街子	自治医科大学 看護学部 講師
	Machiko Saeki Yagi	Lecture, School of Nursing, Jichi Medical University

Background: Investigating future instructional strategies and tackling the systemization of simulation-based learning in undergraduate nursing education in Japan are pressing tasks. The aim of this study was to clarify the status of simulation-based learning in undergraduate nursing education in Japan.

Method: A total of 5,110 individuals—1 from each of 7 fields (fundamental nursing, adult nursing, geriatric nursing, pediatric nursing, maternal nursing, psychiatric nursing, and home nursing) at the 730 schools offering a undergraduate nursing education throughout Japan—were sent surveys regarding their use of simulation-based education and INACSL Standards of Best Practice: SimulationSM using Survey Monkey.

Results: Responses were received from 639 subjects. 82.4% of schools were using simulation-based education. Approximately 30% were equipped with high-performance simulators while approximately 80% were in possession of mid-level performance simulators. Less than 10% of respondents were aware of the INACSL Standards of Best Practice: SimulationSM.

Conclusion: While the number of undergraduate nursing schools in Japan equipped with simulators and utilizing simulation-based education are on the rise, conceptual frameworks and theories such as the INACSL Standards of Best Practice: SimulationSM are largely unheard of.

研究目的

医療安全、患者意識の高揚などの観点から、看護学生が臨床実践の場で技術や臨床判断能力を向上させる機会は減少している。臨床判断能力を向上させるためには、臨床に近い環境で学ぶことが重要であり、シミュレーション教育が米国を中心に発展している。米国においては、simulation-based educationがすでに看護

基礎教育のカリキュラム全体に組み込まれ、不可欠な教育方法となっている。

一方、日本におけるシミュレーション教育は、実践報告は多くみられるものの探索的である(Yagi, 2018, Inagaki, et al., 2018, Inukai, et al., 2018)。加えて、看護系大学の乱立、シミュレーション教育の広がりに伴うさまざまな教授方法の開発、教育環境の整備や教育者の質の担保といった課題もある。このような背景から、

わが国の看護基礎教育課程におけるシミュレーション教育の実態を明らかにし、今後の教育方略の検討ならびにシミュレーション教育の体系化に取り組むことは喫緊の課題である。これまでに、全国教育機関でのシミュレーション教育の運用実態は行われていない。シミュレーション教育が浸透してきている状況の中、全国のシミュレーション教育の実施状況を調査した結果を公表することができれば、全国で試行錯誤をしながら教育に取り組む教育者にとって大きな基礎情報になる。

そこで、本研究では、わが国の看護基礎教育課程におけるシミュレーション教育の実態を明らかにすることを目的とする。

概 要

臨床判断能力を向上させるためには、臨床に近い環境で学ぶことが重要であると言われており、シミュレーション教育が米国を中心に発展している。一方、日本におけるシミュレーション教育は探索的であり、一定の設計基準を用いて実施されている教育例は少ない状況である。加えて、看護系大学の乱立、シミュレーション教育の広がりに伴うさまざまな教授方法の開発、教育環境の整備や教育者の質の担保といった課題もある。このような背景から、わが国の看護基礎教育課程におけるシミュレーション教育の実態を明らかにし、今後の教育方略の検討ならびにシミュレーション教育の体系化に取り組むことは喫緊の課題である。そこで、本研究では、わが国の看護基礎教育課程におけるシミュレーション教育の実態を明らかにすることを目的とし研究を実施したため、ここに報告する。

研究対象は、文部科学省指定した看護師学校の大学263校、短期大学18校、専修学校10校および日本看護学校協議会の会員校439校の

計730校のうち、教育研究機関・看護部門長または看護専門学校長が適任とした基礎看護学、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、在宅看護学の各領域の教員1名、計7名の総数5,110名とした。調査は、学校の設置形態など対象校の属性5項目、シミュレーション教育の実施状況とシミュレータの所有状況の13項目、国際シミュレーション看護学会 (International Nursing Association for Clinical Simulation and Learning: 以下、INACSL) ベストプラクティス: シミュレーションSM (以下、ベストプラクティス) の41項目からなる自己記入式調査票を用いてオンライン上で実施し記述統計を行った。

調査の結果、730校7領域各1名の計5,110名中639名(回収率12.5%)から回答が得られた。学校の設置主体は、国公立大学52校(12.4%)、私立大学76校(18.1%)、省庁大学校4校(1.0%)、短期大学7校(1.7%)、専門学校281校(66.9%)と専門学校が過半数を占めていた。専門領域は、基礎看護学69名(16.4%)、成人看護学64名(15.2%)、小児看護学49名(11.7%)、母性看護学58名(13.8%)、老年看護学72名(17.1%)、精神看護学52名12.4%、在宅看護学56名(13.3%)であった。シミュレーション教育の実施状況について「実施している」は346校(82.4%)であった。医学・看護教育用シミュレータを所有している学校は346校(82.4%)で、所有していないのは74校(17.6%)であった。シミュレータの種類別にみると、多くの学校(72.4%)が高機能シミュレータを所有していなかった。中機能シミュレータをもっていない学校は138校(32.9%)と約3割であった。低機能シミュレータは多くの学校(78.8%)が1種類以上所有していた。VRについては、所有していない学校が409校(97.4%)であり、日本の看護教育の中ではほとんど普及していなかった。模擬

患者 (standardized patient : 以下、SP) については、「活用している」が164校 (39.0%) であった。ベストプラクティスの認知度についての質問では9割以上が知らないと回答し認知度は低かった。しかし、細項目を見ると、シミュレーションのデザインに関連する項目については、学習目標、シナリオデザイン、忠実度の工夫、学習者のレベルとアウトカム、ディブリーフィングについては、過半数が活用していると回答した。

調査結果より、82.4%の学校でシミュレーション教育が実施されており、看護基礎教育においてシミュレーション教育が普及していることが示された。シミュレータの所有状況については、高機能シミュレータの所有率は約3割にとどまっていたが、中機能シミュレータの所有率は比較的多く約8割の学校で所有していた。一方、その活用頻度は低いことも明らかになった。つまり、シミュレータの所有率は十分であるにも関わらず、十分に活用できていないことが示唆された。SPやVRについては、日本の看護教育の中ではほとんど普及していないことが明らかになった。ベストプラクティスの認知度は極めて低かったが、シミュレーションのデザインに関連する学習目標、シナリオデザイン、忠実度の工夫、学習者のレベルとアウトカム、ディブリーフィングについては過半数が活用しているという状況が示唆された。つまり、ベストプラクティスは知らなくとも、過半数はベストプラクティスの基準に沿ったデザイン設計ができていたと言え、ポジティブな結果であった。

－以下割愛－